

の底を這いまわったような体験」から始まる。はじめは家族から見放されてその所在さえわからなかった人が、ある時「家族の所在がわかった」と嬉しそうに報告してくれた。そしてまたしばらくたって、家族と連絡が取れた、手紙が来た、電話で話した、そして会うことができたとその進行状況が、刻一刻と報告されたのである。それは「救われる」とはこういうことなのかということをとにも実感できるものであった。

これこそ「分かち合うことのすばらしさ」であろう。「分かち合い」という言葉こそ出さないが、ここで行われていることはまさに「分かち合い」なのであり、分かち合うことが生活、生き方を変えていくことを実際に体験しているのである。この「心を動かした」という問いかけは、実は「分かち合いのためのもっともよい問いかけ」であるとも思う。

●それは「コミュニティづくり」にほかならない

「静思のひととき」と「三分間生活報告」とが終わって、その日のテーマに入る。二時間のクラスのうち半分近くの時間がここまで「分かち合い」の雰囲気

気がそのグループに根付いてくるようになったら、参加者は間違いなく、この入門講座の時間を楽しみにして来るようになるのである。

私の入門講座は全部で六十回くらいプログラムであるが、それをひととおり終わったころには、とてもよいコミュニティとして成長している。私は講座が終わるころにいつもこう言わなければならぬ。

「実はこのグループは教会の中ではもっともよい共同体（コミュニティ）になっています。残念ながら教会の中にはこのように深い分かち合いのできるコミュニティはとても数少ないことを言わなければなりません。壮年会にしても婦人会にしてもここまで深く分かち合うまでにはまだなっていないことに早晩気づかれることでしょう。」

そのときがっかりしないでください。むしろ、ここで学んだことを活かして教会の中に分かち合いを広め、教会共同体を形成するために、さらにそれを職場や家庭、地域などの生活の場で広げていくために派遣されていくのだということを、わかってほしいと思います。」

(次号につづく)

(つちや・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭)